
のび太戦記

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のび太戦記

【Nコード】
N9775T

【作者名】
葉月

【あらすじ】
文明技術が発達した世界「物質界」 剣と魔法の世界「幻想界」
神の住む世界「天界」

悪魔の住む世界「魔界」 今から二万年前、この四つの世界は一つだった。

それぞれが平等な身分で神、人間、悪魔は互いに協力し合い豊かな世界を築き上げてきた。

しかし、その世界はたった数人の悪しき心を持つ者達の欲望によって破壊と混乱に満ちてしまう。

魔大戦の始まりだった……

長きに渡る戦いは大地を疲弊させ、毒を含む障気を生み出した。人々は滅亡を回避するため神に従い四つの世界をバラバラにし、その時に出来た時の狭間に悪しき者達を封じ込めた。時は流れて現在……

人々は魔大戦も世界がバラバラになったことも忘れていったところ、ある事件をきっかけに各世界に確認され始めた異世界との接点……「ゆらぎ」と呼ばれる空間の歪みが発見され始めたころ異変は始まった……

世界は今、激動の予感を秘め動き出そうとしていた。

登場人物
ドラえもん
(前書き)

どうも、葉月です。登場人物のドラえもん編です。のび太戦記といったら、ドラえもんキャラが居なければ務まりませんよね！

ドラえもん「僕の世界征服見るがいい。世界は僕を欲するか」

葉月「てめえええええええ！　ふざけたこと抜かしてんじゃねえええええええ！！　いっそのこと窒息しろおおおお！！」(ドラえもんに向けてバズーカを放つ)

どごおおおおおおおん!!!!!!

ドラえもん「ふぎやぼー!!」
（空の彼方までぶっ飛ぶ）

あ、今の「いつそのこと窒息しろおお！」はBASARA三成のセリフですw 一度言ってみたかったですww
ごめんねドラえもん。本当は好きだよ？

登場人物 ドラえもん

野比のび太……今回の主人公。昔は心優しく気弱な少年だったが、ある事件がきっかけで運命を担うようになり、弱い自分を捨てて強く生きることを決めた。

生真面目で人柄のいい少年で、射撃の腕前は百発百中を誇る。武器は玩具の銃を改造したもの。（本物の銃は重くて使えないのとこ
と）

また、のび太と似たような境遇で運命を担う兄や姉的存在である選ばれしものの少女少女に出会う。彼らとの新たな絆を深める。

のび太自身は気づいてはいないが大きな力を秘めている。

一年前の戦いで、仲間と共に戦ったことで大きく成長し、かつての親友との新たな戦いが始まるうとする。

骨川スネ夫……のび太のクラスメイトでジャイアンの悪友。おぼっちゃま育ちで人前で自慢することが好き。しかしかなりの臆病者で窮地に陥ると「ママ〜！」と泣き叫ぶほど。しかし、ある事件がきっかけで運命を担うようになり、のび太をはじめとする仲間達と共に旅をする。

ジャイアンと出会うと会話が弾み、「たまには冒険もいいかも」と何気ない一言を言った。のび太達が来る前に少女少女と出会い、二つ以上年上である彼らのことをそれぞれ「ねえ姉」、「にい兄」と呼んでいる。

ヘリオスの四星の一人であるスネ吉は従兄弟で、自分にとって自慢の従兄であるとスネ夫は言う。

剛田 武……通称「ジャイアン」。のび太のクラスメイト。すすきヶ原のガキ大将で喧嘩は強い。かなりの暴れん坊だが、仲間思いのところがあり、思いやりがある。

喧嘩格闘術の使い手で、とてつもない破壊力を持つ。それ以上に歌唱力は破滅的で、敵味方問わず気絶させるほど。この勝負はカービィと匹敵するくらい。のび太達が来る前に少年少女と出会い、二つ以上年上である彼らのことをそれぞれ「姉^{ねえ}」、「兄^{にい}」と呼んでいる。

緑川聖奈……「のび太のBIOHAZARD」に登場するヒロイン。のび太達の学校の生徒会長でテニス部所属。のび太達よりも一つ年上で、彼らのリーダー的存在である。

高い知能を持ち、あらゆる状況を把握する冷静な判断力と決断力を持つ。

のび太の活躍を見て、彼女自身も「年上の頑張らなければ」と強い意志を抱くようになる。恐怖を乗り越えて成長したのも、のび太をはじめとする仲間達との絆の力のおかげである。木実達と出会ってからには彼女達に妹のように可愛がられている。

嵯峨健治……「のび太のBIOHAZARD」に登場する不良少年。原作では死にキャラだったが、今作は木実達に救われて生き残る。ただし、原作のように途中で死ぬかは不明。ピアノは幼い頃から習っていたため得意。

山田太郎……「のび太のBIOHAZARD」に登場する少年。の

び太達の中では最年少で、共に行動する。戦闘能力は皆無だが、のび太達をサポートする。

桜井咲夜……「のび太のBIOHAZARD」に登場する女性。
のび太達の中では結構年上で、姉的存在である。戦闘能力はなかなかで、のび太達をサポートする。

出木杉英才……のび太のクラスメイト。勉強も運動も出来る文武両道の少年。かつては心優しい少年だったが、手のひらを返すように性格が変わり、天才であるという誇りを持ち、他者を見下すような態度を取るようになってしまう。ヘリオスの四星の一人。

戦闘になると性格が変わり、敵をただひたすら攻撃をし続ける。

スネ吉……ヘリオスの四星の一人でスネ夫の従兄。争いを好まないが、ヘリオスの一員としてのび太たちと対峙する。戦闘に関してはエリートで戦闘のエキスパート。

源 静香……のび太のクラスメイト。あの日の事件でドラえもんに殺され、贗にされる。それがのび太とドラえもんの絆を引き裂く引き金になる。

一等指揮正官……ヘリオス最高幹部に値する地位。創造者の右腕。

ドラえもん

二等指揮正官……ヘリオス最高幹部に値する地位。創造者の左腕。

三等指揮正官……ヘリオス最高幹部に値する地位。全部隊の指揮を務めるのは三等の役目であり、一等と二等は特別な指示が無い限り行動することはない。

ジャンヌ……ヘリオスの精鋭部隊をまとめるロボット王国の女王。ジャイアンとスネ夫は彼女の命の恩人で、彼等に対して心を留めている。

過去に彼女の国を救ってくれたヘリオス総帥に絶対の信頼を寄せる。今はロボットをぞんざいに扱う地球人に対して強い憎しみを抱いている。

ドラコルル長官……ヘリオスの長官のピリカ星人。悪知恵が働き、戦闘能力も高め。

ドラえもん……ヘリオスの創造者。二十二世紀の猫型ロボットで、のび太のかつての親友。絶対的な力を誇り、力を求めている。「あの日」を堺にのび太をひどく憎むようになる。

一年前の激戦でシリウスと共に消滅したかと思われたが、左腕を犠牲にして生き残った。

登場人物 オリジナルキャラ (前書き)

私のオリキャラです。のび太達と絡む重要な人物達です！

登場人物 オリジナルキャラ

村田 木実……「無双OROCHI」シリーズ及び「無双」シリーズの主要人物。明朗快活で男勝りな性格。

平成時代に住む普通の中学三年生だったが、魔王・遠呂智が降臨してからは平成時代を代表とする選ばれしものとして三国志と戦国の世界の英雄に出会い、運命を担うことになる。

石田 純……「無双OROCHI」シリーズ及び「無双」シリーズの主要人物。明朗快活でしっかり者。木実の親友で、常に彼女と共にいることが多い。平成時代に住むごく普通の中学三年生だったが、魔王・遠呂智が降臨してからは平成時代を代表する選ばれしものとして、三国志と戦国の世界の英雄に出会い、運命を担うことになる。

真田 雪菜……「無双OROCHI」シリーズ及び「無双」シリーズのメインキャラの一人。無邪気でやや世間知らずのところがあり、何事に対しても恐れない勇敢な立ち振る舞いをする。木実と純の後輩。平成時代に住むごく普通の中学生だったが、魔王・遠呂智が降臨してからは選ばれしものとして三国志と戦国の世界の英雄と出会い、運命を担うことになる。

土岐 彰久……「無双OROCHI」シリーズ及び「無双」シリーズのメインキャラの一人。明るい性格で、初対面に対しても気軽に声を掛けることが出来る。木実と純と雪菜と同じく平成時代に住む少年で、魔王・遠呂智が降臨してからは選ばれしものとして戦う。

日下部 麻穂……「無双OROCHI」シリーズ及び「無双」シリーズのメインキャラの一人。明朗快活で男勝りな性格で、思ったことをズバズバと言い当てる。木実達と同じく平成時代に住む少女。

他にも沢山登場します。

登場人物 ナムカプ編

有栖零児……「NAMCO×CAPCOM」の主人公。日本の特務機関「森羅」のエージェント。冷静で落ち着いているが、パートナーの小牟のおふざけに呆れている。「こいつは重畳」が口癖。「逢魔」との戦いの時に逢魔の頭領・沙夜に額に傷をつけられ、彼女の存在を感知するとその額の傷が疼き出す。

父の形見『護業』（しごふぎょう）を使って戦う。

小牟^{シャオムウ}……「NAMCO×CAPCOM」の主人公。「森羅」のエージェントで零児のパートナー。明るい性格で、ムードメーカー。オタクで、いろいろなジャンルを好む。外見は少女だが、七六五歳の妖狐である。かつては零児の父・正護のパートナーでもあった。

「水燐」^{（すいりん）}を使って戦う。

沙夜……『NAMCO×CAPCOM』の登場人物。零児達「森羅」と敵対する「逢魔」の首領で、十年前に零児の額に傷を付けた張本人。外見は妖艶な女性だが、小牟と同じく妖狐である。

片那……「NAMCO×CAPCOM」の登場人物。沙夜の分身にあたる。黒ずくめの衣装の沙夜に対して、彼女は白の衣装を身に付けている。沙夜の意志のまま動く人形である。

毒牛頭……「NAMCO×CAPCOM」の登場人物。沙夜に従う牛の妖魔。

毒馬頭……「NAMCO×CAPCOM」の登場人物。沙夜に従う馬の妖魔。毒牛頭と共に沙夜に従う。

ワルキューレ……「NAMCO×CAPCOM」及び「ワルキューレの伝説」の登場人物。「乙女の騎士」と呼ばれる戦乙女。慈悲深い性格だが、魔力や戦闘能力は高い。

シオン・ウヅキ……「NAMCO×CAPCOM」及び「ゼノサーガ」の登場人物。ヴェクター・インダストリーの女性職員でKOS MOSの開発計画の主幹技師。

KOS MOS……「NAMCO×CAPCOM」及び「ゼノサーガ」の登場人物。対グノーシス用に開発された戦闘用アンドロイドで、正式名称は「対グノーシス専用ヒト型掃討兵器KP-X」。

M・O・M・O……「NAMCO×CAPCOM」及び「ゼノサーガ」の登場人物。ヨアキム・ミズラヒの手によって造られた人造人間、百式レアリエン。“ある特殊な知覚”でしか捉えられないグノーシスに対して、

接触、観測を目的として開発された百式汎観測レアリエン（合成人間）のプロトタイプ・ヒルベルト実装型。

スタン・エルロン……「NAMCO×CAPCOM」および「ティルズ・オブ・デステイニー」の登場人物。ソーディアン・ディムロスのマスター。純粹で熱血漢だが、鈍感でお人好しな性格。また、寝相も悪く一度寝たら起こすのは至難の業である。

ルーティ・カトレット……「NAMCO×CAPCOM」「ティルズ・オブ・デステイニー」の登場人物。ソーディアン・アトワイトのマスター。女レイズハンター。お金に目がなく、戦いの最中にもかかわらず、お金を拾うほど。スタンと夫婦漫才のようなことも？

彼ら以外にも登場します。

登場人物 戦国BASARA編

伊達政宗……「戦国BASARA」の主要人物。肩書きは『奥州筆頭』。『六の爪』と呼ばれるそれぞれ三本ずつ刀が差したものに差す。「独眼竜」の異名を持つ。英語を話せるクールガイ。

ライバルの武田軍の武将・真田幸村との対決を楽しみにしている。

真田幸村……「戦国BASARA」の主要人物の一人。肩書きは『天覇絶槍』。二本の槍を持って戦場を駆け巡る若き虎。熱血漢で、君主・武田信玄のもとで気合を持って挑む。破廉恥なものを見ると「破廉恥でござるうゝ！」と叫ぶ。

ライバルの伊達軍の総大将・伊達政宗との対決を楽しみにしている。

徳川家康……「戦国BASARA」の登場人物で、「戦国BASARA3」の主要人物の一人。肩書きは『東照権現』。太陽のような明るい性格で、その人柄は人を引き寄せる。少年期は槍を振るっていたが、青年期は拳のみで戦う。

青年期では絆の力をもって、天下泰平のために戦う。武田信玄を師匠と慕っている。

石田三成……「戦国BASARA3」の主要人物の一人。肩書きは『君子殉凶』。豊臣秀吉を神として崇め、豊臣のために働く。戦場では鬼のような働きを見せることから『凶王』と恐れられている。

秀吉を討った家康に対して強い憎しみを抱いている。

前田慶次……「戦国BASARA」の主要人物の一人。肩書きは『絢麗豪壮』。前田家の風来坊。小猿の夢吉を連れて、祭りや喧嘩をやるのが大好きな性格。恋の話を好む。

かつての友である豊臣秀吉と竹中半兵衛との決別はしている。

長曾我部元親……「戦国BASARA」の登場人物。肩書きは『天衣無縫』。四国長宗我部家の頭首で、海を駆け巡る『西海の鬼』。豪放磊落で、寛大な性格で、人柄の良さから部下から「アニキ」と慕われている。

東軍総大将の家康とは親友である。

毛利元就……「戦国BASARA」の登場人物。肩書きは『詭計智将』。安芸の国の領主で、日輪の申し子。部下も捨て駒としか見ておらず、策のためならば冷酷非道な手段を選ばない。また、冷徹に物事を分析する高い知性を持つ。

三成の親友・大谷吉継とは同胞で、馬が合う。

他にも登場します。

第零話 悪夢再び

文明技術が発達した世界「物質界」 剣と魔法の世界「幻想界」
神の住む世界「天界」

悪魔の住む世界「魔界」 今から二万年前、この四つの世界は一つだった。

それぞれが平等な身分で神、人間、悪魔は互いに協力し合い豊かな世界を築き上げてきた。

しかし、その世界はたった数人の悪しき心を持つ者達の欲望によって破壊と混乱に満ちてしまう。

魔大戦の始まりだった……

長きに渡る戦いは大地を疲弊させ、毒を含む障気を生み出した。人々は滅亡を回避するため神に従い四つの世界をバラバラにし、その時に出来た時の狭間に悪しき者達を封じ込めた。 時は流れて現在……

人々は魔大戦も世界がバラバラになったことも忘れていったころ、ある事件をきっかけに各世界に確認され始めた異世界との接点……「ゆらぎ」と呼ばれる空間の歪みが発見され始めたころ異変は始まった……

世界は今、激動の予感を秘め動き出そうとしていた。

＊

僕とドラえもんがお互い敵同士になったのはある出来事がきっかけだった。其の場所とはいつもと変わらないにぎやかな空き地……ジャイアンとスネ夫が何時も此処で遊んでいた場所だ。

だが、今度はいつもとは様子が違ったのだ。

僕がいつもの場所に向かったのだが、たくさんの子供が倒れていた。

子供の肉片や骨、体が半分になっている子供達……たくさん血が流れてて、酷い死臭がして僕は吐き気がした。

一体……誰がこのようなむごい事をしたのだろうか？ あたりを見渡しても死んだ子供達ばかりだ。

土管の上にはしずかちゃんがいた。僕は安心して、しずかちゃんに声をかけようとしたのだが……刹那、彼女の背後からドラえもんが姿を現した。

だが……信じられなかった。まさかドラえもんがしずかちゃんを殺していたとは……僕達はお互い友達だったというのに、裏切られた感じがした。

しかもドラえもんはこの死体である子供達をやったのもドラえもん

んだっただのだ！

あの事件がきっかけで僕もドラえもんもお互い憎み、恨み、怒りを感じた。かつての友達だった僕は敵同士となり、戦った。ともに戦った仲間たちも僕を支えてくれた。

僕はもう、昔の弱虫で意気地なしの僕ではないのだ！ 仲間がいてくれたからこそ、僕は大きく成長したんだ！

もう迷いはしない。過去へは振り返らない……未来に向けて進むのみだ！

*

僕達の戦いはまだ終わってはいない
僕達のこれから始まる新しい夢
が僕達の本当の始まりだった

第一話 悪夢の始まり

僕は今でも忘れられない……「あいつ」が僕の友達を殺し、世界を征服しようとする欲望を持っているという事を

「あいつ」はもう……僕が知っている「あいつ」ではなく……世界征服をたくらむ悪の組織の棟梁だった

僕は「あいつ」の欲望を阻止するために、多くの仲間と協力し知恵を振り絞り……全力で戦った

でも……「あいつ」がいなくなったとはいえど、残った奴らがいる

「あいつ」の残党であるヘリオスの奴らが……「あいつ」の遺志を継ぎ、僕達に混沌の中へ誘わせる

いや……奴らだけではない 僕たちにとって見たことのない化け物の集団や異世界の住人が姿を現した

これから起こるであろう新しい幕開けは始まった

＊

空の色はどす黒く、空から雨が少し強めに降っている。空き地の草原は青々と茂り、雨の粒が葉っぱにあたり、濡れた葉っぱから雫がぽとぽと零れ落ちていく。その草原の真ん中にはぽつんと一人の少年が立っていた。小柄で丸い眼鏡をかけ、黄色い服を着た少年だった。

その少年の名前は野比のび太^{のびのびた}。のび太は草原の真ん中に立ち、雨に打たれながら遠くを見つめていた。彼が見つめる先は何なのか？過去の事なのか……それとも、未来の事なのか？

のび太の背後から紅い傘を差した少女の声が聞こえてきた。

「あ、のび太君。来ていたの？」

「聖奈さん……」

聖奈と呼ばれた少女はのび太よりも一つ年上で、彼の学校の生徒会長だ。聖奈は漆黒のセミロングで、頭に黄色いカチューシャをつけていて、制服を身に着けている。

「いや……ちょっと考え事をしたただだよ。いろいろね」

「でも……あの時はとても信じられない出来事だったわね。街が燃

え、住人達が誰も生きていないということが……」

「ああ、あれは悲惨だったね……。あの時、僕にもう少し力があれば助ける事が出来たのに……！」

のび太と聖奈はあの時の出来事を思い出しながら話した。あのときの光景はあまりにも凄惨で、彼らがあまりにも無力だったという事を悔やんだ。悔やんでも悔やみ切れないもどかしさは今でも覚えている。自分達にもう少し力があれば、仲間を救えたのかもしれない。もう少し強ければ仲間を助け出す事が出来たかもしれない。

だが、今は違う。あのときの出来事がきっかけで自分達はこまでくることが出来たのだから。のび太は臆病なところがあり、逆に人を頼ってしまうほうだったのだが、運命を背負うようになってからはその弱い心を捨てて、人を頼るのではなく、人から頼られるほどに成長したのだ。

人とはそう変わるものなのか？ かつては無力で、頼りない存在だったのが、時を経てからは逞しくなったというのが一番驚愕するものだろう。無力という罪を心に刻まれたから、強くなろうと大きく変動した。それを乗り越えて今の彼等はいる。

「あの時を思い出すと今でも忘れられない痕跡が残っているからね。だけど僕達はもう……。昔の僕達ではない！」

「そうね……。私達は其の悲しみを乗り越えて強くなったんですもの。もう、二度と悲しみを繰り返さないためにも私達は戦う！」

多くのものがなくなり、犠牲となったあの時の出来事。のび太達にとって絶対に忘れる事の出来ないひどく悲しい事件だったという事を深く心に刻まれた。もう迷う事はない。たとえどのような困難な事が起ころうとも、彼等は諦めない。

聖奈はびしょ濡れであるのび太に近づき、傘に入れさせて言った。

「いきましょう、のび太君。みんなが待っているあの場所で……」
「うん……」

のび太は聖奈の言葉に頷き、空き地を出発して仲間がいる場所へ向かった。

*

あの頃を忘れない。あの戦いを忘れない。

僕達はいつとの戦いを経て強くなり、仲間との絆を深めた。

だが……犠牲も増え、仲間を助けられない無力さを時々感じるようになり、相手に対しての憎しみがあふれ出すようになった。

それでも僕達は何度も何度もこの困難を乗り越えた。仲間を信じ、未来を信じ……絆を深めた。

笑ったり怒ったり泣いたり苦しんだり憎んだり……僕達はいろんな感情を持って立ち向かったのだろう。

もう……あの時の思い出も楽しかった出来事も取り戻す事は出来ないだろう……

もう昔のように戻る事は出来ないのだろう……

……
もう……後戻りは出来ないんだ

第二話 仲間との邂逅 迫り来る影（前書き）

お待たせいたしました！ のび太戦記の続きです！
原作とは大きく異なる部分があります。

木実「というか、原作を無視してるんじゃないの？？」

第二話 仲間との邂逅 迫り来る影

空がどす黒く、雨が本降りになった頃にかつて起きた場所……すすきヶ原の空き地を出発したのび太と聖奈は仲間が待つあの場所へと向かった。あまり変わらない景色を見て二人は懐かしむと、多くの人が集まっている場所に着いた。

体が大きく、がっちりとした少年と狐顔の少年……小柄な少年と金髪の不良少年もこの場所にいた。それだけではない。自衛隊陸軍の男女もいるし、少年少女もいた。

のび太にとって久しぶりに会った仲間と、初めて出会う仲間に会った。少年少女もののび太達と会うのは初めてだった。

少年少女のほとんどはのび太達よりも背が高く、年上である。年端も満たない年齢に似合わず大人っぽい人もいれば、子供っぽい人もいるし、明るい人から冷静な人までがいた。

「おい、のび太ー！ 遅かったじゃねえか！」

「相変わらず鈍間のろまだな、お前」

「ジャイアン、スネ夫、ひどいよお！ そんな事言わなくてもいいじゃん！」

「ま、別にいいけど久々にみんな揃ったな」

「そうだね。太郎も自衛隊もいるし、揃ったよね」

相変わらずの会話で弾み、ジャイアンとスネ夫の皮肉にのび太はショックを受ける。久々の再会に心が和んだ。

「のび太、聖奈さん、紹介するぜ。木実姉このみねえと純兄じゅんにい、雪菜姉ゆきなねえに良明兄よしあきに

だ」
「純姉じゅんねえに麻穂姉まほねえ、彰久兄あきひさにもいるよ」

ジャイアンとスネ夫は少女少女に指を指し、紹介をする。少年少女はのび太や聖奈に手を振ったりお辞儀をしたりした。のび太や聖奈も少女少女に深々とお辞儀をした。

お互いに挨拶を交わすと、のび太と聖奈は木実達に質問をする。
何故戦うのかを。

「あの……聞いてもいいですか？」

「何？」

「あの……木実さん達は何故戦うのですか？ 何故、僕達と同じく武器を持つて敵と戦うんですか？」

「……それはね、私達も運命を担うことになったの」

「運命を担う……？ 僕達と同じように？」

「そ。でも、君達とはちよつと違うかなあ？ 私達の場合は魔王によつて世界を融合されてこの世界に巻き込まれてしまつてね。

それで私達は選ばれし者として英雄達と一緒に武器を取り、戦うようになつたんだ」

淡々と説明する木実にのび太達は自分達と似た境遇をしているのではないかと感じた。年端も満たぬ幼い子供だが、運命を担い、戦士として戦う事となる。悲しみを終わらせるために武器を取るところが彼らの共通点だった。

「私達とほとんど同じね……」

「ああ、運命を担うところかな」

「これからどうするの？ みんなで行動を共にする？」

聖奈とジャイアンは木実の説明を聞いて納得した。似通つた点がほとんどで、年端も満たない年齢で戦士になつたこと、運命を担うようになつたことなど改めて感じた。すると横で太郎がこれからど

うするのか彼らに尋ねた。

太郎の質問に、のび太は顔つきを変えて答えた。その眼差しは決意したような強く真っ直ぐな感じだった。

「そうだね……僕達はこれから一緒に行動する事になるだろうしね。

一人で行くよりは仲間と共に行ったほうが得策だね」

「これから宜しくね、のび太君！ 聖奈ちゃん、スネ夫君、たけし君！」

「おいおい俺達は無視かよ……」

「まあまあ健治兄ちゃん。頼もしい人が着たからいいんじゃないの？」

一人で行くよりは仲間と共に行動したほうが得策だとのび太は言う。笑顔で明るい声で木実が言うのと健治は太郎も含めて名前を呼ばれなかったことを不愉快に感じた。その隣に太郎は苦笑いをしてすねる健治を宥めた。

戦士になった理由は違えども、共に運命を担い、戦うために武器を取ったのは同じ。悲しみを終わらせるため、人々の平和のためにも彼等は意を決した。

運命を担うものとして、武器を取り、どんな試練を乗り越えたと

……

「あれが……野比のび太か……」

「思ったよりも可愛い子供ね」

「だが、見た目で判断するな。あの坊主は凄腕と聞く」

「のび太君と一緒に居る子達も油断できないわね。……約一名を除いてね」

のび太達が出発をした後に姿を現したのは二人の美男美女だった。男は長身で細身であるが筋肉があり、左の頬には十字の傷が刻まれている。顔は整っていて、切れ長の目で黄色の瞳、髪は短く、色は白銀。美女は雪のように白い肌で、髪は膝よりも下にある長く、色は水色。顔は整っていて、切れ長の目で瞳の色は翡翠。

のび太は一年前にドラえもんと激戦を経て大きく成長した。射撃の腕前は百発百中で、プロのガンマンも認めるほどだ。また、弱い自分を捨てて強くなることを決意したのび太は多くの仲間と出会い、強く切れることは無い絆を深めた。

二人の男女は後ろからのび太達の会話を聞いていた。仲間も油断できないと女性はある。

「白、あなたは**はく**どうするの？ あの子達の力を拝見する？」

「そうだな……奴を倒すほどの腕前だからな。『あれ』を使って彼らの力を見るか。」

琉衣も手伝ってくれるな？」

「勿論よ……」

男性の方が白、女性の方が琉衣といった。

白と琉衣は寄り添い、恋人のように手を取り合い、抱いた。さん

ざめく降り注ぐ雨で彼らを濡らし、より艶かしく染める。

二人はのび太達の実力を確かめるために『あれ』を使ったため

彼らの目的とは一体何なのか。彼等はい一体何者なのか？

第二話 仲間との邂逅 迫り来る影（後書き）

どうでしたか？ 最後にちらつと謎の男女が現れましたが。彼等は一体何者なのか現在には謎に包まれたままです。その正体はのちのち明かされますので、それまでは秘密にします。

のび太達の実力を確かめるため、謎の男女・白と琉衣は『あれ』の支度をします。

それまでは後ほど明かされます。

最後に登場したオリキャラ・白と琉衣を紹介します。

名前：白はく

性別：男性

年齢：外見は二十代前半。

容姿：細身で長身。白銀の短髪。左頬に傷がある。切れ長の目で、瞳の色は黄色。

＊イメージ声優＊

おおかわ とある
大川 透

＊

名前：琉衣るい

性別：女性

年齢：外見は二十代前半。

容姿：水色の超ロングヘアで、長さは膝より下。瞳の色は翡翠。

イメージ声優

庄司 しょうじ
宇芽香 うめか

では、次回はネタバレですが、のび太達は英雄達に出会います。

第三話 新たな始まり、新たな仲間（前書き）

お待たせいたしました。最新話投稿します！

本編から二ヶ月以上空いてましたww 本当にすみません！

第三話 新たな始まり、新たな仲間

雨が振り続ける中、のび太は仲間達と出会い、木実や純、雪菜がいつも通っている場所へ向かう。それは、かの戦国武将が守っていたと言われる立派な城だった。

「木実姉、ここどこなんだよ？ 何で城に向かうんだ？」

スネ夫は怪訝な顔をしながら木実に尋ねる。何故城に向かうのかと。わざわざ城までいなくてもいいだろうと文句を言うが、木実はやんわりと言葉を紡いだ。

「何でって、私達は必ず会いに行くためにここに向かうんだよ？ で、ここはこの城の天守閣だよ」

「まあ、行けば分かることだし、それまでは楽しみにしてね？」

それまでは楽しみにしてとは、一体どういう意味なのか？ 何も知らないのび太、スネ夫、ジャイアン、聖奈、健治、太郎、自衛隊はその疑問を抱いたまま言われるがままに木実達の後について行った。のび太達は城の中に入り、いかにも和の風流が漂う。壺に畳に屏風に……どれもこれも昔と変わらないものばかりだ。

木実、純、雪菜は部屋の前に立ち、声を揃えてある人物に報告した。

「信長様、秀吉様、例の子供を連れてきました！」

（信長？ 秀吉？ 歴史上の人物の名前？）

木実達が言う人物の名前は、まさかの歴史上の人物の名前だった。のび太達は授業で歴史を習っているため、少しはわかるが、何故歴

史上の人物の名前が出てくるのか頭の上から疑問符が浮かび上がる。
襖越しに明るい男性の声が聞こえた。

「おお！ 木実に純、雪菜じゃねえか！ 中にはいれ！」

「はい、失礼します」

突然木実が正座をして、襖の戸を両手に揃えて開けた。開けた部屋の中には、大勢の英雄達が揃って座っていた。中には日本人ではない人も加わっているらしいが、彼らも参加しているのだ。その真ん中には黒い甲冑を身に付けて頭にはちょんまげがしている男性と、小柄で金色の衣装を身につけた男性が座っていた。のび太達は人の数の多さに若干引き気味だった。

当然、のび太やスネ夫、ジャイアンや聖奈、太郎、健治、自衛隊は彼等に出会ったのはこれが初めてで、緊迫とした空気に押され気味だった。しかし、木実や純、雪菜、彰久、麻穂や良明など、英雄と共に行動している人にとっては慣れである。彼らの視線は、のび太達に向けていて、信じられないほどに冷たい感じだった。

（うわああ……すっごく視線を感じるんだけど……）

（木実姉達はこんなによく平気でいられるよなあ）

（怖いよママァ……）

（凄まじい威圧ね……）

（ガクガクブルブル……）

（けっ！ めんどくせーことにならなきやいいが……）

（これが……戦国武將の威厳か。我らと格が違う……）

冷たくて鋭い視線を向けられても平然としている木実、純（石田）、雪菜ら選ばれしものと良明や純（吉江）は跪き、一礼をした。その代表として、木実は表情も真剣な表情に変わり、普段の明るい声ではなく、冷徹な感じの少し声のトーンを低い感じだった。

「信長様、秀吉様、お待たせしました」

「くく……木実よ、面を上げよ。うぬが連れてきた小僧どもは一体何者、ぞ」

信長と呼ばれた男性は不敵な笑みを浮かべて、木実にのび太達は何者だと問う。木実は「運命を担う子供です」と答えた。信長の隣に座っている小柄の男性、秀吉はすくと立ち上がり、木実達の前まで詰め寄って彼女達の後ろに立っているのび太達を見た。

「ふうん。子供が運命を担う者、か。そんな年で運命を背負うなど、えらくないか？」

ちなみに、秀吉の言う「えらい」とは名古屋弁で「疲れる」とか「辛い」などの意味で使われるものだ。当然方言を知らないのび太達は、「えらい？ そんなに賢くは……」と天然発言をして、張り詰めた空気からどつと開放されたように周囲から笑い声が聞こえた。秀吉は今の「えらい」という言葉の意味を教えて、のび太達は「ああ！」と納得の声が上がった。

「して、お前たち。名前、なんて言うんだ？」

秀吉は笑顔を浮かべながらのび太達に名前を聞いた。のび太、ジヤイアン、スネ夫、聖奈、太郎、健治、自衛隊は緊張しながらも秀吉に尋ねられたことを答えた。

「僕は、野比のび太です」

「骨川スネ夫です」

「剛田武です！」

「緑川聖奈といます」

「山田……太郎、です」

「翁峨健治です」

「ええ名前じゃな！ わしは豊臣秀吉。信長様に仕える武士じゃ！」
「よろしく願います！」

秀吉をはじめとして、のび太達は一通り三国と戦国の英雄達に自己紹介を終えて、挨拶を交わした。のび太達小学生にとって、信長や秀吉をはじめとした歴史上の人物と共に戦うことはまるで夢のようだった。だが、これは現実だ。夢のように見えるが、これは現実だ。

のび太達は信長達にある出来事のことを話した。過去に、彼の親友だったドラえもんという二十二世紀から来た猫型ロボットの虐殺によって、心は裏切られた感じになった。親友だったドラえもんが子供達や彼の友達である少女・源静香を殺したということ。それがきっかけで、お互いに憎悪に染まり、敵対するようになった。のび太は弱い自分を捨てて、強く生きることを決め、仲間との絆を深めてかつての友と戦ったこと。あらゆる試練と苦悩を乗り越えて、今ののび太とその仲間達があるのだ。

そしてまた、時空を歪めて新世界を作り上げたこの世界を舞台に、ドラえもん率いる国際テロ組織「ヘリオス」との戦いに備えているということなど、のび太達は初めから詳しく説明する。全て話し終えたあと、信長達は呆然としていた。まさか、あんな過去があったとは思ってもみなかった。子供でありながら重い運命を担い、戦士として戦うなど辛かったのだろうと痛感する。

「……友に裏切られたこと、戦わなければならないこと、そりゃあおみやあさんたち辛かったんだな」

「でも、今は平気です。ここにいる皆さんには僕達との絆が結ばれていますから！」

「絆、ねえ……。わしらがいるだけでそのヘリオスとやらとに勝てるというのか？」

「勝てるかどうかはわかりませんが……。今の僕達にはヘリオスは勝てないかと思えます。でも、秀吉さん達の力を貸していただければヘリオスに勝てるかと……」

のび太はしどろもどろになりながらも、今のヘリオスの状態について説明した。今ののび太達には勝てないが、秀吉達の力を貸せば勝てるだろうと答えた。

「そりゃあ難しいところじゃな」と秀吉はしかめっ面をして、顎に右手を添えて考える。のび太達もまた、難しい顔をしながら状況を整理する。

暫くの沈黙が続いたところ、最初に沈黙を破ったのは木実だった。少しだけ口が緩み、不安を募らせるのび太を慰めた。

「大丈夫だよ、のび太君、信長様達なら君の力になってくれるはずだよ」

「木実さん……」

「私達もね、君の力が必要なんだ。魔王・遠呂智という奴を倒すのを」

木実達もそうだ。今の遠呂智軍は着実に力を付けているため、彼女達が強くても遠呂智軍はそれ以上に強いのだ。だから、木実もののび太達の力を必要とした。

「……分かりました。木実の言うとおりですね」

「我らも君達の力になろう。また、我らの力にもなってくれ！」

「ま、お互いの目標目指して頑張りましょうや」

「ヘリオスとやらと遠呂智軍が手を組んだら余程強大な力を生み出されるのか……。想像するとおぞましい」

仲間達は、木実の言うとおりだと言い、のび太達の協力を潔く受け入れた。また、のび太達の力がなければ乗り越えなければならぬ強敵を倒すことが出来ないという。のび太達もまた、彼女達の協力を潔く受け入れ、お互いに支え合う仲間として新たな絆を深めた。ヘリオスと遠呂智軍と手を組んだらかなり大きな力を手に入れるだろう。そこで、のび太達は三国と戦国の英雄の力を借りてヘリオスを、貸して遠呂智軍と対抗する勢力を強めていく。

そこで、ふすまを開けるのを見た彼らの前に姿を現したのは赤と黒の服装に、黒と白が混じった短髪、額に傷が特徴の青年と赤いジヤケットに黒色のチャイナ服を身につけ、黄色の髪の手つぽには黒く染まった少女だった。

「そいつは重畳、その件についてだが、俺達も協力しよう」

「まあ、わしらの力に掛かりゃあ百人力じゃ！ はっはっは！」
「驕るな」

突然の彼らの登場で、のび太達はきょとんとした。彼らのボケとツツコミの夫婦漫才のようなノリは緊迫とした空気を吹き飛ばした。

「あ、あの……あなた達は誰ですか？」

のび太は困惑した表情になりながら、青年と少女に尋ねた。

「ああ、自己紹介しよう。俺は有栖零児ありすれいじ、特務機関『森羅』のエンジニアントとしてやっている。こいつは俺の相棒の小牟シャオムウだ」

「小牟じゃ！ よろしくな、小僧達！」

「こ……小僧って……君こそあたし達と年おんなじくらいじゃん」

麻穂のツツコミで、少女・小牟の逆鱗に触れた。

「失礼な！ わしはな、こう見えても七六五歳の妖狐なんじゃぞ！」

小牟の爆弾発言でのび太達は驚愕した。

「な……七六五歳！？ その外見で！？」

「妖だったのか……。ならば始末せねば！」

「ちよい待てえい！ わしが妖だからって始末はないじゃろ！ といつか、ここはどこだと思ってるんじゃない！」

額に緑色の額あてをつけた青年・趙雲が槍を持って小牟に向けた。小牟は妖怪だから始末するのかとツツコミを入れた。

零児は呆れたような顔をしながら暴走する小牟を止める。

「ふざけるのもいい加減にしろ。お前も俺達がここに来たことを伝えるんだろ？」

「うう……」

本来彼らの状況をのび太達に伝えるためにここに来たが、小牟が余計なことをしでかすので、零児が止めなければならなかった。

小牟がようやく大人しくなると、零児はのび太達にここに来るまでの経緯を伝えた。彼等は時空の歪み「ゆらぎ」を通じてこの場所に来ていたということ、また、他の場所で「ゆらぎ」が起こっているかもしれないということなど零児は説明した。

「……その『ゆらぎ』とやらは俺達の世界だけではなく、他の世界にも影響するというのはか？」

オールバックで、左目に眼帯をつけた男性・夏侯惇はゆらぎが起こることで、この世界だけではなく、他の世界にも影響を及ぼすの

かと零児に尋ねた。

零児は腕を組んで淡々と夏侯惇の質問に答えた。

「ああ、そうだ。俺達が住む世界は物質界といい、他にも幻想界、魔界などがあるが……全ての世界が『ゆらぎ』という現象で様々な世界を行き来するんだ」

「『逢魔^{おうま}』の件でもわしらは同じような体験をした。まさか今回もこの現象を目の当たりにするとは驚いたぜ」

「『逢魔』？」

「『逢魔』とは俺達『森羅』と敵対する組織……俺の額の傷は十年前の『逢魔』との戦いでつけられたものだ」

逢魔は零児達と敵対した組織。沙夜^{さや}という女性を筆頭に、毒牛頭毒馬頭など様々な凶悪な人材を率いて零児達と敵対したという。

「だが、沙夜という女は俺達の最後の戦いで滅ぼした。これで、全てが終わったんだ」

零児と小牟はあの戦いを思い出して少々険しい表情になりながら「逢魔」の件についての説明を終えた。のび太達は零児と小牟の説明を聞いた後、しばらくだんまりとした。

「逢魔」は滅んだが、ヘリオスについてはまだ終わってはいなかった。のび太達は、過去にヘリオスと決着が着いたはずだったが、その生き残りが再び暴虐の限りを尽くしているという。

「あの、零児さん。ヘリオスと遠呂智軍の討伐の協力をしてくれませんか？」

「ああ、勿論だ。俺も久しぶりの戦いになるし、腕が鳴る」

「奴らの暴虐を止めるのがわしらの役目じゃろ！ なーっはっはっは！」

純は零児達にヘリオスと遠呂智軍の討伐の協力を頼むと、零児と小牟は潔く受け入れた。零児は逢魔の決戦以来の戦いだし、腕は鳴るといい、小牟は高笑いをして誇らしげに言う。

のび太達は「森羅」のエージェント、有栖零児と小牟を仲間に加え、ヘリオスと遠呂智軍に向けて力を蓄えていった。

のび太達の前に潜む影が徐々に近づいてくることはまだ彼等は知らない

第三話 新たな始まり、新たな仲間（後書き）

いきなりナムカプ主人公登場です！ ナムカプ主人公の零児と小牟のやり取り、すごく好きでした！ これからのび太達はどうかやって彼らと進むのでしょうか？

のび太達に迫り来る影の正体は次回で明らかになります。勿論、白と琉衣ではありませんよ？ w w w

零児「本家はもう少し先の話で俺が出るんだがな。ま、早く登場して嬉しいが」

第四話 ゆらぎと新たな影と仲間（前書き）

今回はマジでカオスになりますw w 新キャラも登場ですおw w w

のび太「途中退場する人も出てきますw」

第四話 ゆらぎと新たな影と仲間

のび太達は城から出発し、それぞれの道に分かれて歩く。

メンバーは以下のように分けられた。

＊＊

くメンバーAく

野比 のび太

緑川 聖奈

村田 木実

石田 純

有栖 零児

劉備

諸葛亮

趙雲

姜維

曹操

夏侯惇

孫尚香

周瑜

凌統

大喬

小喬

織田 信長

豐臣 秀吉

明智 光秀

濃姬

森 蘭丸

徳川 家康

服部 半蔵

本多 忠勝

稻姫

ねね

柴田 勝家

前田 利家

ガラシャ

＼メンバーＢ＼

骨川 スネ夫

翁峨 健治

山田 太郎

真田 雪菜

土岐 彰久

黄忠

魏延

ホウ統

阿国

くのいち

武田 信玄

上杉 謙信

真田 幸村

張角

黄蓋

孫策

孫堅

甄姫

徐晃

張遼

曹仁

夏侯淵

曹丕

石田 三成

島 左近

島津 義弘

立花 ? 千代

直江 兼続

宮本 武蔵

長宗我部 元親

メンバー

剛田 武

自衛隊

日下部 麻穂

直江 良明

吉江 純

甘寧

呂蒙

陸遜

孫權

水ウ徳

張コウ

典韋

許緒

星彩

関平

月英

馬超

張飛

関羽

小牟

袁紹

左慈

お市

浅井 長政

佐々木 小次郎

＊＊

くメンバーAく

のび太達は城を出発し、東の方角へ突き進む。街並みは一見良好に見えるのだが、実は襲撃を受けていた。屋根は壊れ、家も破壊される。また、人々は混乱に陥り、逃げ惑うばかりだ。雨は上がり、水溜まりができて燃えさかる炎は消えない。

聖奈は今の街の光景を見て悲しそうな顔をしてのび太に聞いた。

「のび太君、どうしよう……」

「……………」

のび太は呆然とした顔で悲惨な光景を眺めていた。趙雲、夏侯惇、劉備は苦虫を噛んだような表情をして、目を背けた。木実も純も、目を大きく見開いた。

その中でも、先に動いたのは零児だった。零児はのび太達を呼びかけて街並みを歩きながら状況を把握するように指示をする。のび

太達は零児の言うとおりにその街並みを歩いた。

また、この悲惨な光景にしたのも、「ゆらぎ」の影響で起きた現象だと説明する。

「これが『ゆらぎ』が起きた現象だ。突然、何者かが街を襲うというのが奴らのやり方……」

「それ……遠呂智が降臨した時と似ているだと思います」

「姜維さん？」

「私達の世界を融合させた力と……同じような……」

姜維は零児の説明にピンと閃き、「ゆらぎ」という時空の歪みは木実達が経験した遠呂智が時空を歪めて三つの世界を融合させた時と似ているのだと告げた。

木実達も遠呂智が降臨して妖魔の集団に襲撃を受けて壊滅状態まで陥れられた経験をした。

「確かに似ているな。そのオロチとやらの力と『ゆらぎ』は確かに時空の歪みの現象で起きている」

「零児！ あれを見ろ！ 誰がいるぞ！」

周瑜が指で人影が居る方向に指した。一体何者なのかは知らないが、三人の少女が立っていた。

「子供……？」

趙雲は槍を構えるが、三人の可愛らしい少女を見て首をかしげる。

「……女の子？」

「しかも……年で言う小学生くらい？ そのうちの一人がのび太君か聖奈ちゃんくらい？」

木実と純は首を傾げながら三人の少女を見る。背丈は小さく、幼い少女が二人、小柄でのび太が聖奈くらいの年齢の少女が一人。三人の少女の気を感じた零児はハッとして、注意を呼び掛ける。

「みんな！ 油断をするな！ 小さな少女とはいえ凄まじい気を感じる！」

「！？」

零児の警戒の呼び掛けで、のび太達は驚愕して、小さな少女の方へ顔を向ける。そのうちの一人の少女はにっこりと無邪気な笑顔を浮かべてのび太達を見た。その笑顔は愛らしいが、逆におぞましくもある。のび太達は少女の笑顔を見て、背筋が凍った。

次の瞬間、少女の姿は消えていつの間にかのび太達の近くまで近づいていた。一瞬にしてのび太達のもとまで近づいたことに彼等はぎょっとした。

「なっ……！ いつの間に！？」

「速い！」

のび太達は少女達から距離を取り、戦闘態勢に入った。しかし、それを見逃さない一人の少女はのび太達を追い、のび太達の周りに結界を張った。のび太、周瑜、孫尚香、家康、秀吉、姜維、ガラシヤはその結界の中に閉じ込められてしまった。

「のび太！ みんな！」

「尚香ちゃん！ 秀吉様！」

木実と零児は閉じ込められたのび太達の名前を叫ぶ。
のび太は剣を持って結界を叩くが、バチバチと電流が流れた。電

流はのび太の体まで入り、思わず剣を手放してしまう。

「くっそお……出られないのか！」

「みんな！下がってて！」

木実是一对の剣を二つに分け、剣を交差させる。二つの剣から雷と水が現れて、両腕を上下に動かし、円を描き、勢いに任せて結界に向けて水と雷を放った。

「水紋！すいもん 風雷波！ふうらいは」

水と雷が交差し、雷が水流の周りを螺旋状に渦巻く。そのまま、のび太達を閉じ込めた結界に直撃する。しかし、結界は破れることなく、木実の技を耐える。

「くううつ……破れるおおお……！」

「無駄だよ。あたしの結界はあなたの技でも壊せないもん」

「！？」

愛らしい声が木実の真下に聞こえると木実は顔を下に向けた。顔を恐る恐る下に向けると、声の主である少女と目が合った。木実は恐怖に怯えたような顔をして、少女は満面の笑みで見つめ合う。

「おねえちゃん、何怖がつてるの？怖がらなくてもいいよ？」

「ひっ……！」

「けど、安心して。あたしはおねえちゃんたちにきがいを加えないから」

少女の笑顔が逆に恐怖に染まり、木実は目を大きく見開き、動かなくなっていた。その時、弓矢が木実の横を通り過ぎ、結界に向

かつて飛んでいった。弓矢が結界に当たった時、矢は燃えた。

「矢よ応えて……！」

弓矢を放った正体は稲姫だった。今度は矢を五本番えて弓を横に構えた。意識を集中して、標的を結界に向ける。仲間を助けるためなら、命を捨てても構わないという強い思いを抱き、力強い声で弓矢を放った。

「はぁあああ！」

だが、五本同時に放っても結果は同じだった。今度は中に入っている周瑜が炎を放った。が、爆発してのび太達を巻き込んだ。煙の中で咳き込むのび太達。

「けほっ、けほっ！ 危ないでしょ！ 人がいるんだから！」

「けほけほ……！ すみません、姫様」

「外からでも中からでもダメならやつぱあの子を倒さなきゃ……！」

結界は何をやっても破壊することができず、やはり術者である少女を倒さなければならなかった。木実、純、零児は結界を張った小さな少女を見る。

警戒をしている零児は『護業』^{ゴギョウ}を構えて、少女達に向かって叫ぶ。

「お前達は一体誰だ！ 誰の命令でこんなことをする！」

少女達は笑いながら外に残っている人に向かって瞬間移動をする。また、少女の手が光り、鋭利な刃物が現れた。そして、そのまま木実の腹に目掛けて刃物を突き出した。殺気を感じた木実は慌てて剣で防ぎ、弾いた。続けて純は体を回転させて少女の頭を目掛けて踵

落としをする。

少女は純の足を片手で受け止め、何も微動だにしなかった。岩を砕くほどの威力を持つ純の踵落としを小さな少女が片手で受け止めるのは極めて困難だ。しかし、この少女は本当に純の攻撃を片手で受け止めたのだ。

「あたし達はただ、『あの人』のめいれいにしたがっただけ……人殺しはしたくないけどね、『あの人』のためならどんなにひどいこともする」

「だって、わたし達は『あの人』の使い魔だから……」

「つ、使い魔！？ 君達が！？」

「そう……わたし達は『恋焰^{れんえん}』。『あの人』に召喚された使い魔なの」

のび太は目を見開いて彼女達の正体を明かしたことに驚いた。『恋焰』とは、三人の少女の総称で、個人の名前はそれぞれ星樺^{せいが}、琳^{りん}、里依^{りい}である。ちなみに、純の攻撃を受け止めたのは琳。小柄で耳は長く、露出の高い衣装を着た翡翠色のロングヘアの少女。星樺は右肩を露出した服を着た金髪のロングヘアを一つにまとめた少女。里依は二人よりも小柄で、菫色のロングヘアの少女だ。

信じられなかった。幼い彼女達が『あの人』の使い魔だったということに。しかも、彼女達はいずれも人間ではないのだ。

純は受け止められた足を下ろして、今度は風をまとった斬撃を繰り出す。琳は身軽な体で純の斬撃を簡単にかわす。

「街を壊せと『あの人』に言われた。だから、言われたとおりにやっただけだよ」

「お前達は一体何が目的だ！？ お前達は何故、俺達の街を襲う！？」

里依は淡々と言葉を並べ、上の人からの命令に従ったまでと言うが、零児は彼女達の行動について、何が目的なのか声を張り上げて問い詰める。

すると、他のところから違う声が聞こえてきた。声色はトーンが低めの女性のものだ。

簡単なことだ。お前達のところにいるあの娘を貰いに来た

「あの娘だと！？ 木実のことか！？」

女性の声に対して、零児は木実を庇いながら声を荒らげる。木実が狙いなのかと零児は言うも、女性は木実ではないと答える。

違う。『あの方』の命により、赤い服の娘と白い服の娘を捕らえよということだ

「赤い服の娘と白い服の娘……？」

一瞬誰のことなのかを考えるが、しばらく考えるうちにそれが誰なのか分かってしまった。そう、彼女が言う赤い服の娘と白い服の娘とは、二喬のことだったのだ。

「まさか……二喬！？」

木実はハッとして後ろを振り返ると、のび太にとって見覚えのある顔ぶれが劉備達を取り囲む。茶色の軍服の兵士と青色の軍服の兵士……彼らこそがテロ組織『ヘリオス』のものだった。

純も木実の声に反応して振り向くが、琳がそれを見逃さず、術を使って純を動けなくし、重力を増幅させて、純の体を重くした。純は体を動かそうとするが、琳の術にかかってなかなか体が言うこと

を聞かない。

「ううつ……体が、重い……！」

「あははは！ 苦しい？ 動けないでしょ？ そりゃそうだよ。重
力を上げて重くしたんだもん」

「ぐつ……」

琳はにい、と可愛い笑みを浮かべて倒れている純を見下ろし
ながら言う。普通の女の子としてならばメロメロになるであろう彼
女の笑顔は今の純にとって恐怖である。

*

一方、取り囲まれた劉備達は奮戦した。ヘリオスの兵士は銃で応
戦するが、彼らの圧倒的な強さでヘリオスを押す。劉備は剣を振る
い、ヘリオス兵士の腹や首、喉元を斬りつけた。夏侯惇も勇敢に刀
を振るい、次々とヘリオスの兵士を斬り捨てた。

稲姫は矢を番え、放った。また、弓を自在に振るい、ヘリオスの
兵士を斬る。

「思ったより手強い連中だ！ なかなかやる！」

茶色の軍服を着た兵士は劉備達の想像以上の勇姿を見て、只者で
はないと感じた。一撃で五人を倒すほどの実力者もいるのだ。

「何、そこにいる小娘二人を捕まえるだけよ。隙を狙って行けばい
い」

「それが……小娘二人も強いんです！」

青い軍服を着た兵士は小娘二人……二喬を捕らえるだけでいいと言つが、茶色の兵士は二喬も強いということを伝える。そこを見ると、大きな扇を二つ持ち、応戦中の二喬の姿があつた。彼女達も可憐な姿をしているが、立派な戦士だ。扇を振り回し、投げてヘリオスの兵士を一掃する。

「絶対に捕まるわけにはいきません！」

「誰があんた達のところに行くもんですか！　ふざけないでよ！」

二喬は扇を構えながら警戒をしてヘリオスを睨みつける。だが、次の瞬間だつた！

「！？　きゃあああ！」

「おねえちゃん！？」

二喬の姉・大喬は長身で細身の体をした青年に捕まってしまう。青年は銀髪で、背中まで伸ばしたロングヘア、右目が赤で左目が水色のオッドアイ。右目の下には文様が付けられる。

「しまった！　大喬！」

「大喬殿を離せ！」

周瑜が叫ぶが、未だに結界が解けられず何も出来ない自分が悔しかった。姜維は槍を構えて、青年に向かって突撃するが、青年は大喬の首元に小刀を突きつけた。

「！？」

「動くな。動けばこの娘を殺す」

「くっ……！」

青年の人質になった大喬は小刀を突きつけられて、恐怖で身動きが取れなくなる。もし、抵抗すれば自分も殺されるのかもしれない。

「フィオ様、直々にいらつしやいましたか！ 感謝します！」

「ふ…… お前達ではこの者達に苦戦するだろうと思つてな」

青色の軍服のヘリオス兵士は青年・フィオの登場に敬礼をした。

フィオは口を緩ませて、微笑み、大喬を捕らえたまま歩く。趙雲は「待て！」と叫び、追いかけるが、ヘリオスの兵士が押し寄せていく。小喬も声を張り上げてフィオに向かって姉を返せと叫んだ。

「おねえちゃんを返せ！ 離せえええーッ！」

小喬は怒りに任せてフィオに向かって走り出し、扇を上下左右に振るう。危なっかしい小喬の攻撃をフィオは簡単によける。しかも彼の腕には小喬の姉の大喬がいるのだ。

「小喬！ 駄目よ！ あなただけでも逃げて！」

「嫌だ！ こいつを倒して…… こいつを倒さなきゃおねえちゃんが！」

「この人はあなたの敵う相手じゃないわ！」

必死にフィオに抗う小喬だが、彼の足元にも及ばず、お腹を蹴られ、数メートルほど吹き飛ばされた。宙を舞い上がり、地面に叩きつけられ、小喬は身動きも取れなくなってしまう。このままでは小喬も捕らえられてしまう。そうはさせまいと先に動いたのは蘭丸で、体に似合わない大きな刀を構え、小喬の前に立った。

蘭丸の勇姿を見た劉備達は結界を解きに向かったり、小喬を守る

ために向かったり、それぞれのやるべきことを行なった。

しかし、忘れてはいけけないのが『恋焰』の存在だった。彼らよりも小柄のため分かりづらいのだ。彼女達は小さいながらも凄まじい能力をもっている。

里依は劉備達の勇姿を見て、滑稽だと高笑いした。

「あはははははははは！ あなたたちに何ができるの？ それに、フィオさまにつかまってるおねえちゃんは助けなくていいのお？」

「黙れ！ 大喬も小喬も我らが守ってみせる！ 大喬も助けてみせる！ 絶対にだ！」

その勇気は認めるが、もう諦める。お前達にフィオには勝てない木実達に話した時と同じ女性の声だった。劉備達は女性の声にびつくりした。

「カイナか……何故お前は姿を見せない？」

まあ、私の出る幕ではないと思ってな

「丁度今、赤い服の娘を捕獲した」

白い服の娘はどうしたのだ？

「まだ行なっているところだ。だが、そうはさせないと抵抗する者がいてな、あの者達は奴らに任せてある」

フィオは大喬の首元に小刀を突きつけながら、女性・カイナと会話する。さっきは小喬も姉を返せと刃向かってきたと彼女に伝えた。

分かった。フィオ、その赤い服の娘を連れて戻れ

「承知」

フィオはカイナの言うとおりに大喬を抱えて一步、また一步と歩き出す。

「待て！ 逃がすものか！」

夏侯惇は朴刀『麒麟^{きりんが}牙』を構えながらフィオを追う。しかし、ヘリオスの兵士は夏侯惇の行く手を阻んだ。

「邪魔をするな！ 邪魔立てするならば貴様らも斬り捨てる！」

「ぎゃああああ！」

「ぐおおおお！」

遮るヘリオス兵士を夏侯惇は容赦なく斬り捨て、血飛沫を上げる。ヘリオスの兵士の断末魔が聞こえるが、里依も星樺も悲しむどころか、逆に楽しんでいるかのようだった。

「抗ってみせてよ。できるものならね！」

ヘリオスに立ち向かう劉備達に里依と星樺は甲高い笑い声を上げて、抵抗するならやってみると挑発的な口調と、幼いながらも残虐な態度で言った。

「あなたたちに危害を加えないというのは本当だけど、邪魔をするなら別だよ！」

星樺は左手を上げて水色の光が左手のもとに集まっていく。短時間で水色の光が一瞬で大きくなり、空に向かって投げた。光は天高く上げられ、爆発したあと、空から雨のようなものが降ってきた。それが劉備達を襲う。雨のようなものの正体は光の刃だった。刃の雨だったのだ。

それはヘリオスにも命中し、彼等は断末魔を上げる。その時は既にフィオは姿を消していた。『恋焰』とヘリオスの兵士だけだった。否、正確には『恋焰』のみだったとか。ヘリオスは劉備達にやられ、刃の雨にもやられた。

まさに哀れな全滅の仕方だった。

「うわあああああ！」

降り注ぐ刃の雨には劉備達は身動きが取れなくなっていた。武器を構えて防ぐが、腕やら頭やら足やら刃が突き刺さる。不思議にも『恋焰』にだけは当たらず、平然と刃の雨の中を歩いた。

狙いは……当然もう一人の小喬だった。小喬はフィオに返り討ちにされて動けない状態になり、刃の雨は腕や足に突き刺さり、刺さったところから血が流れている。

星樺と里依は、身動きが取れない小喬に手を伸ばそうとしたその時、カイナとは別の声が聞こえてきた。今度の声は決して低めの男性のものだった。

『恋焰』、我らの役目は果たしたぞ。至急戻れ

「ちょっと待ってて、えいれん 縷漣、このおねえちゃんを連れてからね！」

琳も男性・縷漣の声が聞こえたのか、金縛りと重力の術を解いて純の束縛を開放し、結界を解いた。

「あれ？ どうしたの？」

これには木実、純、零児にもとんと分からなかった。今にも殺しに掛かりそうな勢いだった可憐な少女達は普段の少女に変わり、木実達に告げる。

「撤退の命令だってさ。もう、あたし達の任務は終わったし、もう帰るね」

「待つて！ 恋焰！ 君は……私達を……！」

「あたしは琳。『恋焰』っていうのは、星樺と里依とあたしがまとめて呼ぶときの名前なの」

「ならば琳、帰る前に一つ教えてくれ。『あの人』とは一体誰のことだ？ お前達は『あの人』の使い魔だと言ったよな？」

歩いていった琳の足がぴたりと止まり、零児の問いに答えた。可愛らしい笑顔は絶やさずに。

「『あの人』とは……白様と琉衣様、ヘリオスの総帥のことだよ」
「！？」

ヘリオスの総帥。ヘリオスをまとめる総大将だ。木実達は「ヘリオス」という単語に反応し、驚愕する。

また、彼女達にとつて、聞いたことのない名前が出てきたのだ。白と琉衣という謎の男女。実は恋焰は白と琉衣の使い魔だったのだ。また、ヘリオスの総帥の命令に従い、破壊の限りを尽くしたのだ。琳は役目を終えて、「星樺も里依も役目が終えたみたいだし、そろそろ帰るね」と言い残したあと、琳は風のように撤退する。

また、光の刃も消えて刺さった部分だけが残っていた。木実達の激戦は、二喬を捕獲されたことで、幕を閉じる。

琳の結界に閉じ込められていたのび太達は、木実や純、零児をはじめとして、いろいろなことを聞いた。二喬が捕らえられたことや、ヘリオスの総帥のことや、白と琉衣という謎の男女のことなどを話した。

のび太はヘリオスの総帥のことを知っていた。それは、彼にとって大切な友達だったからだった。のび太は悲しそうな顔を浮かべて左手を胸の前に置いた。

聖奈はそんなのび太の顔を見て、首を傾げながら様子を見る。

「どうしたの？ のび太君」

「何でもないです。聖奈さん。ちょっと考え事をしてただけ……」

のび太は聖奈に声を掛けられてハツとするが、心配する聖奈に大丈夫だと、心配ないと答えた。

「行きましょう。スネ夫やジャイアンが来てるはずですよ！」

＊＊

くメンバーBく

一方、スネ夫達は城から北の方角へ進んでいる。メンバーAとは違って変わって、襲撃を受けておらず、無事だった。スネ夫は仲間達に寄り道をしようかと提案する。

「うん、こっちは無事のようにだし、寄り道でもしようか？」

「スネ夫兄ちゃん、寄り道って、どこに？」

太郎はスネ夫にどこに寄り道するのかと尋ねると、スネ夫は自慢気に胸を張って「買い物に決まってるだろ？ のび太や木実姉達、僕達にいろんなものを買っただよ」と言った。ファミリーマートやらコンビニやら、必需品となるものを買うということだった。

雪菜はああ、と手を合わせて納得し、頷いた。

「賢いんだね、スネ夫君って！」

「いやあ雪菜姉、僕はただ、食料品とか補充してみんなでやるだけでさあ……」

「手当をするための医療品も買わなきゃね！」

「鞆の中とかポーチの中とかなかったっけ？ そんなもの」

雪菜、彰久もスネ夫の会話に乗って、楽しく日常的な会話をしてるところだった。彼らの目の前に、時空の歪み『ゆらぎ』が現れた。その光景にスネ夫達は一体何のことなのかさっぱりわからなかった。武将達はそれぞれの武器を構えて警戒した。

「え？ 何？」

「何者！？」

「何なの？」

雪菜はあんぐりとして『ゆらぎ』を眺めていて、幸村、千代、曹仁は武器を構え、『ゆらぎ』を睨みつけ、スネ夫はぼかんとした顔で『ゆらぎ』を見た。

時空間の中から眼鏡を掛けた茶髪の女性とピンク色のボブヘアの少女と青色のロングヘアで、額に機械を付けた女性、茶髪の男性だった。先に目が覚めたのは男性だった。

男性に続いて、眼鏡を掛けた女性、青色の髪の女性、ピンクのボ

ブヘアの少女に目を覚まし、ゆっくりと体を起こして立ち上がった。

「あゝいたたた……ひどい目に遭ったあ……」

「ここは……？」

「シオン、お怪我はありませんか？」

「大丈夫よKOS・MOS。ありがとう」

シオンと呼ばれた女性は朦朧とする意識の中、辺りを見渡し、KOS・MOSと呼ばれた女性の気遣いに感謝する。

「シオンさん、過去に……来れたのですか？」

「そうね……一時はどうなるかと思っただわ」

少女はシオンにここに来たことを聞くと、シオンは腕を組んで難しい顔をしながら答える。

「そういえば、過去の世界ってこんな感じなのね、M・O・M・Oちゃん」

「M・O・M・Oにも詳しいことはよく分かりませんが……家もビルも何となく似てますよね」

シオン達にとって過去の世界を今一度感じ取るが、男性・アレンはシオンの肩をトントンと叩き、スネ夫や雪菜達の方へ指を指した。

「主任！ 気が付けばほら、見かけない顔が一杯いますよ！」

「アレン君、何？ あ……本当だ。子供と、何かの武装隊のようね」

シオン達の登場に混乱するだけのスネ夫達は、ただ彼女達を見ているだけだった。

「え？ 何？ 何か出てきたよ？」

「めんどくせえ連中が来やがったな」

「作業服っぽくない？ あの男の人と女の人のやつ……」

当然彼女達はお互い初対面だろうし、どの世界の人間なのかも知らなかった。両者は見つめ合ったまま何も言わないで固まっていた。

暫くの沈黙が続いた後、先に口を開いたのはスネ夫だった。スネ夫は、しどろもどろになりながら、シオン達に声を掛ける。

「ねえ、君達は誰なの？ どうやって……ここまで来たの？」

スネ夫の質問にシオンは代表として答えた。

「『超未来物質界』……簡単に言うとな私達、未来から来たの」

「み……未来！？」

「タイムスリップでもしたの！？」

雪菜と彰久は驚愕して、シオン達が未来から来たということを初めて知る。未来からというと、もしかしてタイムスリップでもしたのかと雪菜と彰久は思った。

雪菜と彰久だけではなく、スネ夫も三国や戦国の武将達も彼女達が未来から来たということに驚愕する。

「あはは……タイムスリップとはちょっと違うかな？ 移転したといった方がいいかな？」

「つまり場所が移り変わったってということだったんだ。あたしは

真田雪菜。あなた達の名前はなんていうの？」

「僕は骨川スネ夫。この世界のお金持ちさ」

「僕は土岐彰久。よろしく」

「真田幸村だ。お見知りおきを」

スネ夫達はそれぞれ自己紹介をして、今度はシオン達の自己紹介をした。

「シオン・ウツキです。で、こっちは私の後輩のアレン君」

「アレン・リッジリーです。よろしく」

「で、この子は百式観測用レアリエンのM・O・M・Oちゃん」

「M・O・M・Oといえます。よろしくお願いします」

スネ夫達にとって聞き慣れない単語が浮かび上がって頭の上から疑問符が沢山浮かび上がった。彼等は「百式観測用レアリエン」の意味が全く分からなかった。

「ひゃくしきかんそくよう？ 何それ、会社名？」

「レアリエンって……何かのメーカーの名前？」

名前だけでは思い浮かばなくてスネ夫達はどんなものなのかを難しい顔をしながら想像した。

シオンは「百式観測用」について難しく考えるスネ夫達に簡単に説明した。

「レアリエンは合成人間のこと。特殊能力を持っているんだけども殆ど人間と同じなのよ」

「つまり、人造人間なんだ」

「まあ、そういうことになるわね」とシオンは頷くと、今度はK

OS・MOSの説明をした。

「彼女は戦闘用アンドロイドのKOS・MOS」

「アンドロイド!? この人が!？」

「ありえないよ! この人がアンドロイドだったなんて!」

スネ夫、健治、太郎、雪菜、彰久はKOS・MOSがアンドロイドだったことを知らず、声を揃えて叫んだ。幸村や曹丕など三国や戦国の英雄はアンドロイドのことも人造人間のことも全く知らなかった。

「なあ、雪菜。あんどろいどって何だ? 俺、んなもん聞いてもさっぱり分かんねえ」

「じんぞうにんげんも分からないな……」

「アンドロイドとは、人が作ったからくりのこと。で、人造人間は見た目は普通の人間と何の変わりもないけど、中身が機械だったり、腕が機械だったりといった感じかな?」

正確にはアンドロイドも人造人間も同じ意味だが、雪菜はアンドロイドと人造人間を別々に分けて答えた。

お互いに挨拶や自己紹介を終えた後、スネ夫達は今後の行動について話し合う。これは深刻な問題でもあり、今後の彼らの進む道でもある。

シオンは深刻な顔をしながらヘリオスの目的を説明をした。

「ヘリオスはこちらに向かって来るわ。実はね、ヘリオスはM・O・M・Oちゃんを狙って探しているのよ」

「M・O・M・Oちゃんが!? どうして?」

「目的はM・O・M・Oちゃんを使って、ヘリオスを強くしようと企んでいるの。だから、私達はM・O・M・Oちゃんを守らなきゃ

ならないのよ」

シオンの視線はM・O・M・Oに向けて、ヘリオスが彼女を狙う理由と目的を告白すると、スネ夫や雪菜、彰久は眉をひそめて拳をぎゅっと強く握り締めた。ヘリオスの行動と目的に対して、多少怒りと憎悪が大きくなったのだ。

「M・O・M・Oちゃんを利用する奴らなんか、絶対に許さない！」
「ヘリオスなんぞにM・O・M・Oちゃんを渡すものか！」

「シオン、M・O・M・Oは僕達を守るよ！ 怖いけど、アイツらなんかにM・O・M・Oを渡すわけにはいかないんだ！」

「みんな……ありがとう。M・O・M・Oちゃんもみんなが守ってくれれば心強いわ」

ヘリオスへの憎悪と対抗の心を持ってヘリオスからM・O・M・Oを守るうというスネ夫達の強い意志と決意を固めると、シオンは彼らの強い意志と決意の言葉を聞いてほ、と安堵する。M・O・M・Oも彼らの強い意志と決意で少しだが、心が和らぎ、曇っていた表情は晴れた。

気持ちを切り替えて、今度はヘリオスと遠呂智軍の行動について話し合う。当然、シオン、KOS・MOS、M・O・M・O、アレンは遠呂智軍のことを全く知らなかった。今度は雪菜達がヘリオスに与する遠呂智軍のことを説明した。

「お……おろち？ や……ヤマトノオロチ??」

「遠呂智は我らの世界を融合した魔王。ヘリオスとは互角かそれ以上の能力を持った妖の集団だ」

「遠呂智の参謀には妲己^{だっき}という女の人がいてね、彼女の策には特に注意したほうがいいよ」

三成と彰久は遠呂智軍の軍勢と特徴、参謀である旦己について説明した。遠呂智軍は強大な力を持った妖魔の軍団で、その力はヘリオスに匹敵するだろう。

ヘリオスと遠呂智軍はお互い膨大な力を誇っており、手を組んでしまつと彼らに勝てる可能性は皆無に近い。だが、少しでもこちらに可能性があれば、どんな逆境でも乗り越えられるはずだ。

まずは彼らとの決戦に備えての準備をしていたところだった。

「じゃあ、まずはヘリオスと遠呂智軍に向けての下準備といこうか」「買い物行つて、食料品とか医療品とかを揃えておかなきゃね!」「いろんなものを買つて、のび太君達に合流して渡そう!」

必要となるのは当然、食べ物や医療品といったところだろう。また、ナイフや銃など武器になるものも探さなければならぬ。

スネ夫達はのび太組とジャイアン組と合流する前に必需品となるものを買いに向かった。

メンバーC

一方、ジャイアン達は城から西へ向かっていたところ、突然襲撃を受けて初っ端から死者を数名ほど出した。死亡したのは自衛隊全て、馬超、月英、許緒、典韋、張コウ、ホウ徳、甘寧、袁紹、小次郎。彼等は爆発を受けて絶命したのだ。襲撃を仕掛けたのは、額に目が付いていて、銀髪のショートヘアの中性的な少年だった。外見は木実と純と同一年くらいで、瞳の色は右目が淡い緑色、左目が赤

色のオッドアイだった。

額にある目はとてつもない能力を持っており、開眼すれば、今の襲撃の威力は半分以上撃破することが出来るのだが、今は額にある目は閉じているため、威力は小さい方だった。だが、それでも死者を出すほどの威力を持っている。

「てめえ……！　よくも……！」

ジャイアンは仲間を殺された少年に対して強い怒りと憎しみを抱き、睨みつける。

「あはは……人間って脆いねえ。あつという間にくたばっちまったよ」

少年は狂喜しながら死骸を見る。その死骸は原型すら留めていなかったの肉の塊になっていた。地面が血の海となって肉の塊を平然と踏んで、ジャイアン達に向かって歩く。関羽と張飛はジャイアン達の前に立ち、それぞれの武器を構えて戦闘態勢に入った。

「あんた達もこいつみたいになりたければかかってきなよ。どうせ俺に挑んだところで結果は同じだろうしねえ」

「てめえ！　言わせておけば！」

張飛は少年の挑発に乗って怒りに任せて蛇矛を振り上げるが、少年は片腕で張飛の矛先を受け止める。張飛は目を見開いて驚き、少年はにい、と笑っていた。

「もうちょつと遊んでやろうと思ってたが……『あの人』の命令だからね。あんたもここで消えてもらつよ」

「なん……だと……！？」

少年のいつもの高い声から一つトーンが下がり、より殺気を感じさせる。張飛は少年の殺気に体が動かなくなってしまう。否、そうではなく、彼が動かないのは少年の額の目が開いたからだ。その開いた額の目を張飛は見て、全く身動きが取れなくなったのだ。その時の少年は人格もガラリと変わり、口調も少年とは思えないほど残虐だった。目の色も両目とも赤で、瞳孔は縦長になった。

「張飛さん！」

「待ちな。あんた達の足元を見る」

「!？」

ジャイアン達は張飛を助けるために向かおうとするが、少年に足元を見ると言われ、恐る恐る足元を見た。彼らの足元には赤い線が引かれていた。

「なっ……!!? 何だ!？」

「何で地面に赤い線が引いてあるの!？」

「気がついたかい? そうさ、あんた達の足元にあるのは赤い線さ。この赤い線を越えるとどうなるか……分かってるんだろうな？」

少年の言葉に遂に怒り心頭のジャイアンと関羽の二人は赤い線を越えて少年に向かって走り出す。

「ふざけるなあああああ! いい気になりやがってえええええええ!」

ジャイアンの怒号が響き渡り、怒りに任せてジャイアンは少年に向けて拳を振るおうとした。

刹那、大きな爆発音が起こり、血飛沫が降り注いだ。ジャイアン

だけは無事だったが、関羽と張飛は粉微塵となり、べったりと全身に血がついた。また、新しく血の海が出来上がり、ジャイアンは茫然とした。また二人がいなくなってしまった。

彼らの子供である関平と星彩も親の無様な死に様を見て、呆然し、口に出すことすら出来なかった。

「あ……ああ……」

「ち、ち……うえ……」

「関羽と張飛が……！　ありえん……」

「これで分かっただろ？　赤い線を越えるとそのうちの誰かが死ぬってね。ま、あんただけ無事なのは運がよかっただけさ」

「ばしゃ、と赤い水の上に跪き、ジャイアンは怒りの感情が一気に消え失せ、喪失と絶望の感情が現れた。少年によって一気に半分以上も仲間を失い、更には怒りの感情で関羽と張飛までもが失ってしまった。」

「武……」

「仲間を失ったのはあんたのせいだよ。感情に流されて俺に立ち向かうからこのような状態になったんだ」

「……………」

「後悔しても無駄だよ。失っちゃったのはもう戻れないからね」

少年の言うとおり、失ったものはもう戻れない。仲間を守れなかった弱さと、後悔を抱く。ジャイアンだけではなく、小牟も麻穂も何も出来なかった無力感を感じ、拳を強く握り締めた。その時はもう足元には赤い線が消えており、移動しても何も起こらなくなっている。また、少年の額の目は閉じて、目の色も戻り、人格もまた戻った。

すると、空から聞こえるのはのび太達の時に聞こえたカイナでも

纓漣でもなく、別の女性の声だった。

随分派手にやったのね……クエス。もう少し加減をしたらどうなの？

「沙羅^{サロ}かい？ 俺はこれでもかなり加減してる方だよ。本気でやったらコイツらなんかあっという間に死んでるさ」

あなたは私達の中でも一、二を争うほどの実力者なのは分かるけど……今の力だと街も破壊するわよ

「そんなの分かってるよ。『あの人』の命令でやったまでだ」

少年　クエスと女性　沙羅の会話を聞いて、ジャイアンや小牟、麻穂達はあの少年が強敵だとは思っててもいなかった。どうりで仲間を半分以上も失うわけだ。クエスは白と琉衣の使い魔の中でも一、二を争うほどの実力者で、主にジャイアン達に使った爆撃を使う。

クエスの爆撃は制御することが出来ず、下手すれば沙羅の言うとおり街までも破壊するだろう。それくらい彼の攻撃はいずれも強力で、手が付けられないほどである。

『恋焰』もようやく任務を果たしたみたいよ。あなたも早く戻って

「分かったよ。俺も今すぐ戻る」

クエスは沙羅との会話を終えて、通信を切った。通信を切った後、クエスは視線を麻穂達に向けて無邪気な笑顔を浮かべて告げた。この笑顔は狂気に満ちた笑顔ではなく、純粋な子供のような笑顔だった。

た。

「俺は用事が入ったのでね、そろそろ帰るよ」

そう告げると、彼は踵を返して背を向けて歩くと、制止の聲がかかる。

「待て！」

クエス呼び止めたのは、仲間の死の時に何も動けなかった小牟だった。彼女はクエスの名前と目的を教えろと問う。

「せめてぬしの名前を教えてください……ぬしらの目的とは何じや？」

「俺はクエス。俺は『あの人』の命令に従い、任務を全うする使い魔さ。俺達の目的は……今のところは教えないね」

「少しだけで良い！　ぬしの言う『あの人』とは一体誰のことじや？」

「『あの人』とは、白様と琉衣様……ヘリオス総帥のことだ」
「！？」

ヘリオス総帥……ジャイアンはクエスのヘリオス総帥の発言について目を大きく見開く。ヘリオス総帥とはジャイアンにとつてよく知る存在のことだった。ジャイアンは虚ろになっていた目から光が入り、視点が徐々に一つになっていき、瞳に映る像が分裂しているように見えていたが、徐々に一つになっていく。

ジャイアンの目から映すのは、背中を向けた少年の姿だった。銀髪のショートヘアに中性的な容姿、額に目があるものだった。

少年　クエスは首をジャイアン達の方へ向けて、別れを告げる。

「じゃあな。今回はここまでにしておくよ」

「次に会った時は、今よりも少し強くやるから覚悟しな」と忠告をしたあと、彼は風に包まれて姿を消した。

クエスの襲撃に遭い、仲間を半分以上も失い、家やビルなどの中には半壊しているところがあり、所々血の海になっていた。だが、この圧倒的な強さでもまだ全力ではないという。

クエスだけではない。彼の他にもいろいろな使い魔があり、クエスよりも強い存在もいるだろう。

だが、ヘリオスだけではなく遠呂智軍にも注意をしなければならぬ。遠呂智軍もまた、ヘリオスと並ぶ強大な力を持っているのだ。ジャイアン達は、失った仲間達のためにも決戦に備えて準備に取り掛かった。

「みんな、失った人は多いけど、無駄にしないで気持ちを切り替えて戦いに備えよう！」

麻穂は未だに意気消沈している仲間を励まし、気持ちを切り替えようと声を掛ける。励まされた仲間は浮かない顔をしていながらもすぐに気持ちを切り換えた。

「わしらもはよ行くぞ。のび太達が待つておる！」

「そうだね。急ごう！」

小牟と麻穂は、のび太組とスネ夫組が待つ場所に向かおうと仲間達に声をかけた。

ジャイアンもゆっくり立ち上がり、ズボンにべったりついた血を濡れたティッシュを使って血をしっかりと拭く。当然ズボンだけではなく、上半身も返り血を浴びて血まみれだった。

「麻穂姉え、服の替え、持っていないか？ 何か鉄臭くて……」
「ごめんね、武君、何も持っていないんだ。持ってるのは医療品だけだし……」

移動しながら替えの服を持っていないかと麻穂に聞くが、彼女は服は持っていないが、医療品だけ持っているだけだった。

ジャイアン達のはび太やスネ夫組が待つあの場所へと向かった。

＊＊

一方、屋根の上から高見の見物をしていた男女二人 白と琉衣と、赤と黄色で愛らしい姿をしたピエロのような形の生物のはび太達の行動について話し合う。

「のほほほ、クエスさんもド派手にやつちやいましたねえ。いきなり死者を出すなんて、どれだけすごいんでしょうねえ」

「クエスはまだ子供だけど……それだけ凄まじい力を秘めていたということよ。ただ、力を制御することが出来なかったというのが欠点ね」

「恋焰もフィオもいい働きだったな」

最初は自分の仲間について話し合う白達。

白と琉衣の使い魔の初めての実戦のため、任務を成功するのかと思っていたが、予想以上に任務を上手く成功したことを賞賛する。

「『あのお方』の命令で二喬を捕まえろと仰ってましたが、どうな

りましたかねえ？」

ピエロは独特な口調で白と琉衣に二喬はどうなったのか聞いた。白は腕を組んで口元を緩くして微笑みながら問いに答える。

「あの子達はもう二喬を捕らえた。任務は成功した」

「そうなんですかあ、それなら『あのお方』も喜ばれるでしょうね。のほほほ」

「ジョーカー、まだ油断は出来んぞ。総帥の最大の敵も我らに備えて支度をして、挑むそうだ」

白はのび太達を危険視をして、次の任務をピエロ　ジョーカーに報告する。その任務とは、ヘリオスにとって鍵となる「百式観測用レアリエン」のM・O・M・Oを捕らえることだった。

「ドラコルルもお前も『百式』を求めているのだろうか？」

「百式」とは、M・O・M・Oのことである。M・O・M・Oを捕らえて、情報収集をするのもヘリオスの役目だ。今現在は彼女の搜索をしているところだった。

「まあ『あのお方』が力を欲して、彼らも手を組んでるわけですよ」「搜索の方は首尾よくやっているの？」

「儀式を行うための贄を探しているんですよ。『百式』とはまた別の目的ですけどね」

ヘリオス総帥の力を手に入れるため、M・O・M・Oの捕獲や贄の対象となる女性を探すのが彼らの目的だった。

「だが、のび太達もそう易々と百式を渡すまい」

「そうね……あの子達だけではなく、新手の者もなかなか手馴れね」
のび太やジャイアンだけではなく、遠呂智軍と対峙する木実や純、麻穂、逢魔騒乱時代に活躍した零児などヘリオス総帥の障壁となる存在が次々と現れたのだ。

「まあ、私は見慣れた人もちらちら見かけたんですけどねえ。特に、額に傷がありましてね赤いジャケットを着た人が……」

ジョーカーにとって逢魔騒乱の時代の時に零児達と何度も激突したため、零児達とは面識がある。ちなみにジョーカーが率いているのは人間ではなく、可愛いうさぎのような形の魔獣だ。白と琉衣、ジョーカーの三人の背後から赤毛のポニーテールに左目に眼帯をつけた女性が現れた。彼女の左目は見えないわけではないが、その左目に特殊能力を持っているため、抑えるために眼帯をつけている。

「彼らが向かう場所が分かりました。『物質界』の『渋谷』です」
「ご苦労だったな、二ナ。だが、渋谷と言えば閉鎖地域ではなかったのか？」

「そこまでは詳しくはわかりませんが……彼らが渋谷に向かうのは時空の歪みを調べるためだとか……」

二ナはしどろもどろになりながら、のび太達が渋谷に向かう理由を述べる。時空の歪みと渋谷と何か関係があるのかもしれない。

「分かった。纓漣やカイナにもこれから動いてもらうとするか。彼らの役目を与えなくてはな」

「白さんも大変ですねえ。まるで『あのお方』みたいなリーダー的存在で、琉衣さん達をまとめるとは……」

ジョーカーはのほほほと手を口に当てて白はリーダーだと賞賛するが、琉衣は不機嫌な顔をしてジョーカーを睨んだ。琉衣もまた白と同じく、恋焰やフィオ、クエスなどをまとめるリーダーだ。しかし、彼女はリーダーというよりは白をサポートする副リーダーに違いない。

「……ジョーカー、私も一応まとめ役をやっているのよ？」
「によほほほ、ごめんなさいね。そういえば琉衣さんもそうでしたねえ」

琉衣もそうだったとジョーカーは軽く謝罪すると、白と二ナは苦笑いをした。ジョーカーの発言によって何だか緊迫とした空気を吹き飛ばした感じだった。

ジョーカーは二人に戻るようと言われ、彼は二ナと共に残りの贄を探しに向かうと伝えた。

「では私は二ナさんと一緒に儀式のための贄を探索します」
「分かったわ。私達は先に戻るわね」

彼等は報告を終えるとそれぞれ風のように姿を消して、それぞれの役割を実行した

第四話 ゆらぎと新たな影と仲間（後書き）

＊新キャラ＊

フィオ

性別：男性

イメージ声優：関 智一

容姿は説明のとおり。性格はクールで、ヘリオス総帥に忠誠を誓っている。また、冷酷な手も打つことも？

カイナ

性別：女性

イメージ声優：豊口めぐみ

容姿は今回は出なかったが、金髪のロングヘアで露出の高い服を着ている。性格は冷静沈着で、感情を表に出さない。

＊恋焰＊
れんえん

琳^{りん}

性別：女性

イメージ声優：川田妙子

容姿は説明のとおり。性格は幼い分無邪気で残虐なことを平気でこなす。本来は争いを好まない。白と琉衣の使い魔

星樺^{せいが}

性別：女性

イメージ声優：大谷育江

容姿は説明のとおり。性格は琳と里依に比べて冷静で、判断力が高い。年相応の少女のところもあり、冷酷な手段も下すことも？ 白と琉衣の使い魔

里依^{りい}

性別：女性

イメージ声優：釘宮理恵

容姿は説明のとおり。性格は幼いゆえか、いたずら好きで狡猾な手段を下す。白と琉衣の使い魔

櫻漣 えいれん

性別：男性

イメージ声優：立木文彦

容姿は出てこなくて声のみ。姿は短髪のオールバックで、黒ずくめ。使い魔の中ではリーダー的存在で、常に堂々としている。

クエス

性別：男性

イメージ声優：関 智一

容姿は説明のとおり。性格は残虐で加虐的な行為を好む。また、恋焰に次いで年齢が若いものの使い魔の中ではかなりの実力者。

沙羅 シャロ

性別：女性

イメージ声優：水樹奈々

容姿は出なかったが、姿は赤いメッシュがついた桃色の超ロングヘアでドレスのような服を着ている。

二ナ

性別：女性

イメージ声優：ゆかな

容姿は説明のとおり。白と琉衣の使い魔で、忠誠を誓っている。
性格は冷静沈着。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9775t/>

のび太戦記

2011年10月9日03時47分発行